

アジア系米国居住者の語りにみる自己／他者の「声」と経験の融合

－アフターコロナの視点から評価されるコロナ禍の経験－

木場安莉沙(名古屋文理大学)

1. はじめに

本研究は、2024年1月から3月にかけて実施した米国在住の協力者19名を対象とするインタビューに基づき、米国でいわゆる「コロナ禍」を経験したアジア系の人々が、感染症そのものとは別に差別・排除といった社会的「パンデミック」をどのように経験し、それをどのように語るかを明らかにすることを目的とする。コロナ禍が少数者に及ぼした社会的影響に関する研究としては、アジア系を「他者」として周縁化したり、We/Theyという二項対立の「They」として位置づけるディスコースの影響を指摘した Barreneche (2020)や Gover et al. (2020)の研究がある。

これまでに災害や戦争に関する語りの機能及び性質について主要な役割を果たしてきた分野として、ナラティブ研究が挙げられる。東日本大震災の被災者の語りを談話分析の観点から考察した佐藤 (2020)は、被災者が語りを通じて「成長者／被害者としての自己」といった複数のアイデンティティを表出したり、その間で「揺れ動く」ことを明らかにしている。佐藤が指摘するように、こうした語りは被災者が過去を捉え直すきっかけとなるだけでなく、被災しなかった人々が震災を「他人ごと」ではなく「自分ごと」と捉えることにも繋がる。この点において、感染症そのものだけでなく米国におけるアジア人嫌悪など社会的な「二次災害」にも直面した少数者から災害伝承を試みることは、コロナ禍の全体像を把握する上で有意義である。子供の時に第二次世界大戦を体験した生存者の語りを分析した松木 (1998) や Okugawa (2021)は、生存者が戦時中にメディアや周囲の大人から発せられた「声」をナラティブ内に取り入れながら、‘then and there’=戦時中と、‘here and now’=現在の自己を結び付けていると指摘している。本研究では、このようにコロナ禍「渦中」の経験と、それを評価する対話時点での「現在」の語り手の声との融合を指摘しつつ、そこにさらに他者の声が干渉し、評価に影響を与えることを明らかにする。

本稿で取り上げるインタビュー参加者の簡潔なプロフィールを以下の表1に示す。インタビューは全てZoomを使用して日本語ないし英語で実施し、談話分析の手法を用いて書き起こした。

表1. 本稿でデータを使用するインタビュー参加者 (名前はIE以外全て仮名, その他項目は本人の説明による)

	エスニシティ	性別／ジェンダー	滞在／居住地域	業種
Denise	日系アメリカ人	女性	カリフォルニア	ファイナンス
Mai	ベトナム系アメリカ人	女性	サンフランシスコ	NPO
Shoko	日本人	女性	カリフォルニア	非営利セクター
Arisa (IE)	日本人	女性	日本	大学教員

2. データ

本節では実際のインタビューデータから主要な箇所を抜粋し分析する。Denise (以下D) は、父と訪れた飲食店で、知らない女性からヘイトスピーチを受けた経験について以下のように語っている (下線は筆者による強調)。

<例1>

1. D: and then she sort of randomly like turns around and starts talking to my dad

2. (.)

3. A: [um-hm

4. D: [and it's like oh like why: <is your culture>(.)or what is ↑it like(.)why(.)

5. A: °()°

6. D: it was like why- why is your- why does your culture cause COVID(.)or like
 7. A: [uh
 8. D: [why(.)like why did you guys start COVID or something like that
 (中略)
 16. D: so it was weird because you would think like(.)she would be embarrassed or like she wouldn't say that like(.)in a
 17. store in public in front of other people but(.)it became so common(.)because like Trump was blaming(.)China
 18. A: [yeah yeah
 19. D: [all sorts of people were blaming Asia(.)that it became [so(.)like just normal for people to be like
 20. A: [um-hm
 21. D: [so why did you guys- why- why did-(.)like [why- why- why do you do this
 22. A: [°hm° [um-hm
 23. D: why did you cause COVID and it's like no

4-8行目でDは女性の発言を再現しているが、Tannen (2007)は話者によるこのような自己/他者の発言の再現を‘constructed dialogue’ (創作対話: 井出, 2013)として引用とは区別し、唱和的対話、対話の例示や要約、「内心の発話」などを表す機能があると述べている。“Why did you/your culture cause/start COVID?”という発話の繰り返しは、Dが実際に対面した人物に限らず、“all sorts of people”の発言として言い直されており、唱和的に大勢の人々によって繰り返しなされた発言として提示されているのである。Dはこうした発言がトランプ前/次期大統領の発言に起因すると考えており(17行目)、“all sorts of people”にとって常態化された発言および態度となったと述べている。

これと対照的に、以下の例2ではMai (以下M)による創作対話で、自身の「内心の発話」として構築されている。
 <例2>

1. M: he is just()in his: ↑eighty may↑be he was going for a walk(.)
 2. A: [um-hm
 3. M: [a:nd(.)there is this <guy> from across the street ran over: a:nd kicked him(.)very hard that he knocked over:
 that is just one of the public cases
 (中略)
 9. M: for Asian-American to see that it's kinda(.)make us angry like why this happening(.)like(.)are they blaming us
 (中略)
 11. M: fortunately: nothing: I don't(.)experience(.)any of that(.)but
 12. A: [um
 13. M: [it makes me more aware whenever I walk around(.)

Mは高齢のアジア系男性が殺害された有名な事件を引き合いに出しつつ、9行目で“why are they blaming us”と自身が当時感じた疑問を内心の発話を表す創作対話によって示している。当該事件の被害者は高齢男性1名であるものの、Mは同じ行の“(it) make(s) us angry” “why are they blaming us”において、目的語を“us”としている。つまり、Mは事件を“we”すなわちアジア系の人々全体に対する脅威と評価したのであり、男性の被害に対する疑問はアジア系コミュニティ全体が抱いたものとして提示されている。また、後の13行目から分かるように、Mは主語を“T”に切り替え自身にも起こり得るものとして、男性の被害と自身がこれから遭遇し得る被害を結び付けている。

次の例3では、Shoko (以下S)が、「コロナ禍」以降に感じた変化について語っている。
 <例3>

1. S: イミグレーションで並んでる時とかではなんか(.)wha- what's going on とかってゆってほんとに(.)
 2. a- I'm an American citizen とかって一人でゆってたりとか:(.)でも
 3. A: [あ:
 4. S: [みんなだってアメリカンシティズンか:[グリーンカード()
 5. A: [hh そうですよね hh
 6. S: うん この列に並んでるのは でもたぶん彼が言いたかったのは自分は白人のアメリカンシティズンなのに:
 7. なんでアジア人と一緒に(.)あの(.)んんん
 8. A: ん:=
 9. S: =あの ま 並ばなきゃいけないんだってゆう そうゆうのが結構見え見えな人とか:

1-12行目でSは、空港で苛立ちを露にする白人アメリカ人の発話を再現しているが、6-9行目でこれに自身の解釈

を加えつつ「自分は白人のアメリカンシティズンなのになんでアジア人と一緒に並ばなきゃいけないんだ」と和訳し、元の発話者本人の「内心の発話」として提示している。Sは他にも事例をいくつか挙げ、コロナ禍以降の変化として人種差別を露にする人々が増え、そのような言動が許容される雰囲気共有されるようになったと述べている。この約9分後にSは、自身を含むアジア系の人々が国籍に関わらずタクシー等で頻りに“Where are you from?”と尋ねられるという問題にも言及している。Kim (1999)やAlim (2010)が述べるように米国においてアジア系の人々は「永遠の外国人」と位置づけられてきた歴史を持ち、こうした経験は他のアジア系インタビューイヤーからも頻りに聞かれるものである。Sは2017年と2019年にもインタビューに参加しているが、過去2回のインタビューでもこの問題に言及しており、この質問に象徴される「外国人扱い」は米国居住歴が30年以上になるSの生活経験において蓄積されたものであること、また例3で述べられていた発言の解釈はこうした経験と共鳴するものであることが分かる。

3. 考察

Bakhtin / Volosinov は、人が言語を用いる時には常に他者の「声」の反復や充当が行われており、また、「声」の呼び出しは常に評価的視点 (evaluative viewpoint) の呼び出しを伴うと考えていた (Maybin, 2001)。Tannen (1987) も、反復に際して聞き手は意味を拡張させるため、反復には聞き手の再解釈と意味の変化が付随すると述べている。例1の4, 6, 8行目においてDは飲食店における女性の発話の再現を試みており、発話の中で非難の対象は“your culture”から“you guys”に移行する。これはDが実際の発話を思い出そうとして言い直したというだけでなく、実際に「文化批判」にかこつけた人種差別が横行していた社会情勢がDの解釈や談話に反映された可能性がある。木場・張 (2023)では、SNSにおけるコメントの分析から、「文化」が「人種」の言い換えとして人種差別的ディスコースに用いられていること、特に新型コロナウイルス感染症 (以下 COVID-19) に関する文脈で多用されていることを指摘した。Dの創作対話内で非難の対象が文化から人に移行するのは、コロナ禍における人種差別的ディスコースが「COVID-19を引き起こした文化への批判」という名目で横行していたことと呼応している。21, 23行目の創作対話では非難の対象が人のまま持続し、トランプ発言に倣ったあらゆる人々の発言として再現されている。ここでの反復も、トランプ発言を繰り返す不特定多数の人々による唱和的発話として再現されている。また、コロナ禍以降、そうした発言が常態化されるようになったという内容は、Shokoのインタビューとも重なるものである。

例2からは、自身は直接的にヘイトスピーチ/クライムを経験していないというMが、アジア系男性が襲撃された有名な事件を通じて自身の社会的位置づけを解釈し、行動に影響を受けたことが読み取れる。Shiff & Noy (2006)は、ホロコースト生存者がDemjanjukというナチスの看守をshared meaning (会話参加者の間で共有されるシンボル等が持つ特定の意味) として用いながらアイデンティティを構築する過程を明らかにしている。Shiff & NoyのインタビューイヤーはDemjanjukについて戦争が終わるまで聞いたことが無かったが、ナラティブの中でDemjanjukは戦時中の混沌や無秩序、生存者が目撃した残虐行為等の象徴として用いられ、個人的経験を解釈し伝達するための言葉を与えている。Mにとっては先述の事件がコロナ禍における混沌やヘイトの象徴ないしshared meaningとなり、アジア系全体や自分個人の位置づけおよび経験の解釈を語るリソースとして機能している。

最後に、例3では“I’m an American citizen”という他者の発話が、Sによって意味づけられ提示されている。この発話を再現する際にSは両手の拳を振り上げる動作をし、発話者の怒りを表している。抜粋箇所直前には、アジア系人口が多いサンフランシスコでの経験であることに言及しており、コロナ禍以降アジア系の人々に対して「フラストレーション」を表す白人が増えたと述べている。Bakhtin (1975)も「個々の具体的な発話はつねに、評価的な意味をもった文化的コンテキスト、あるいは個々の個人生活の状況のコンテキストのなかにある」(桑野訳, 2009: 237)と述べるように、“I’m an American citizen”はその場その時のコンテキストにより多様な意味を持ち得る。先述の通りSは“Where are you from?”という発話に象徴されるアジア系の社会的位置づけに以前から疑問を感じており、そもそもアメリカ国民や永住権取得者しか並ばない列で「自分はアメリカ国民だ」とわざわざ明言する行為には、「周りにいるアジア人とは違い、自分は「正統な」アメリカ国民だ」といった内容が含意されていると解釈したのである。

4. 結論

本節では、冒頭で述べた本研究の目的を振り返りながら、自己や他者の「声」がどのように融合しながらコロナ禍の経験やその評価を形作っているかを確認する。例1のデータでは、Dが実際に女性から受けた発話やトランプ前／

次期大統領の発言が、その他大勢の他者の声および社会的態度、アジア系をめぐるディスコースを表すものとして提示されている。言い換えると、コロナ禍における D 個人の経験だけでなく、そこに至るまでの／それと結び付くアジア系を取り巻く社会・政治的ディスコースが唱和的発話として示され、それを現在の視点から提示するのに声の再現や創作対話が機能している。例 2 のデータでは、M が過去の自分やアジア系全体の怒り・疑問を表す声を現在の自分の声と結び付け、自身に起きた変化を説明するためのリソースとしている。当時の社会的状況や感情を表す内心の発話が、現在の自分を表現するためのリソースとなっているのである。例 3 のデータでは、空港で実際に S が見聞きした発話が、コロナ禍でアジア系への差別意識を露にするようになったその他大勢の他者の声および社会的態度を象徴するものとして解釈され、提示されている。これには S のコロナ禍での経験だけでなく、“American citizen”として扱われないというアジア人としてのこれまでの生活経験もが表れている。

まとめると、再現された発話や創作対話によって、話し手は現在の視点から過去だけでなく現在の自身をも評価し解釈する。また、ナラティブの中で、語り手は他者の声を自身の声として語り直し、自己／他者を融合させるだけでなく、過去／現在の自己をも融合させる。この時再現されるのは発話だけでなく、当時の社会情勢やこれまでの経験であり、語り手が生きたディスコースである。これらを自身の声によって語ることで、経験は形作られ継承される。

参考文献

- Alim, H. S., Lee, J., & Carris, L. M. (2010). “Short Fried-Rice-Eating Chinese MCs” and “Good-Hair-Havin Uncle Tom Niggas” : Performing Race and Ethnicity in Freestyle Rap Battles. *Journal of Linguistic Anthropology*, 20(1), 116-133.
- Bakhtin, M., M. (1975). *Voprosy literatury i estetiki*. Moskva: Khudozhestvennaia literatura, p. 44.
- Barreneche, S. M. (2020). SOMEBODY TO BLAME: ON THE CONSTRUCTION OF THE OTHER IN THE CONTEXT OF THE COVID-19 OUTBREAK. *Society Register*, 4(2), 19-32.
- Gover, A. R., Harper, S. B., & Langton, L. (2020). Anti-Asian Hate Crime During the COVID-19 Pandemic: Exploring the Reproduction of Inequality. *American Journal of Criminal Justice*.
- 井出里咲子 (2013). ナラティブにおける聞き手の役割とパフォーマンス性：震災体験の語りの分析より 佐藤彰・秦かおり (編) ナラティブ研究の最前線 ひつじ書房 pp. 43-63.
- Kim, C. J. (1999). The Racial Triangulation of Asian Americans. *Politics & Society*, 27(1), 105-138.
- 木場安莉沙、張応謙 (2023). オンラインディスコースにおける「文化批判」に見られる人種主義—アニマルライツ団体の事例から— 社会言語科学会第 47 回研究大会発表論文, pp. 79-82.
- 桑野隆 (2009). 危機の時代のポリフォニー 水声社
- 松木啓子 (1998). ディスコースアプローチにおける言語イデオロギーをめぐって—制度的装置としてのエスノグラフィックインタビュー再考— 言語文化, 4(1), 1-20.
- Maybin, J. (2001). Language, Struggle and Voice: The Bakhtin/Volosinov Writings. In M. Wetherell, S. Taylor, & S. J. Yates, (eds.) *Discourse Theory and Practice: A Reader*. London: Sage, pp. 64-71.
- Okugawa, I. (2021). Atomic Bomb Survivor Testimonies as Sociolinguistic Data: An Approach from Discourse Analysis. *Inter Faculty*, 11: 99-134.
- 佐藤彰 (2020). 仮定の語りにおける語り手のアイデンティティ構築：震災経験をどう語るのか 秦かおり・村田和代 (編) ナラティブ研究の可能性—語り映し出す社会 ひつじ書房 pp. 99-122.
- Schiff, B., & Noy, C. (2006). Making it personal: shared meanings in the narratives of Holocaust survivors. In A. De Fina, D. Schiffrin, & M. Bamberg (Eds.), *Discourse and Identity*. New York: Cambridge University Press, pp. 398-425.
- Tannen, D. (1987). Repetition in Conversation: Toward a Poetics of Talk. *Language*, 63(3), 574-605.
- Tannen, D. (2007). *Talking Voices: Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse 2nd Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

書き起こし記号

(.)	[:	◇	↑	° °	(空白)	hh	=
マイクロポーズ	発話の重なり の開始	直前の音の 引き延ばし	周辺より 遅い発話	音の 上昇	周辺より 小さい音	聞き取り 不可	呼気	ラッチング